

リギ山上の一夜

斎藤茂吉

青空文庫

スイス
瑞西の首都 [Zurich] 《チュリヒ》をば午後二時十分発の急行列車で立った。そして、
方嚮ほうこうを東南に取り、いわば四方から湖に囲まれたという姿の、Rig. 《リギ》の山上に一
夜泊ろうとしたのであった。

汽車の立つ時、窓から首を出して見ていると、向うの丘陵に家のたて込んである工合は
丁度長崎を思わせるようなところがあった。汽車は急いで走った。だんだん山地になり、
その起伏の工合が如何いかにも鮮媚せんびであるのが通常ではない。遥かの谷間から出て来る川の水
は濁つて勢づいて流れていた。

それから汽車は Zuger 《ツウゲル》 See 《ゼエ》の湖に沿うて南下した。その湖畔には
綺麗で小さっぱりとした村落などが見える。長い短い隧道トンネルを幾つかくぐり、隧道を出る
と電気工場などがあつた。すでに峻峰しゅんぽうが見え出して来て、その裾に雲がかたまり薄く
藍の色に見えている。午後三時頃 Zug 《ツウグ》という駅に著いた。ここは前面には湖
を眺め、うしろに山を負うた村であつた。そこらを通るとき、どうも瑞西の住民は独唄人

などとは人種の違うところがある。猶^{ユダヤ}太人などと共通の顔貌をした者が幾らもいるなどと思つたのであつた。ただ鼻が大きく眉の濃い者がいて、それが山人さびた重厚の感じを与えた。

Arth 《アルト》-^{ゴルダウ}Goldau ところからいよいよ登山車に乗り換えた。山に登るに従

つて眼界がひろくなり、西北の方にも、東南の方にも湖が見える。そうして、湖の水の光つているところ、影になつて紺青に黝^{くろ}ずんでいるところ、そういう趣が段々と變つて行つた。紅葉した木々もそろそろ見えるようになった。高い峰の方から流れて来る水が滝となつて懸かつているところもある。頸^{くび}に鈴をつけた牛が直ぐ近くにいて、耳を動かしてこちらを見ていたり、幾つかの鈴の音が下の谿^{たに}の方で鳴るのが聞こえたりした。そういう牧牛がこの山に五千からいるそうであつた。実用向の鈴が、遍歴する旅人の耳には実用向でなくきこえる。一体、「仮感」とか「仮象」とかいう審美論者の説にも、やはり根ざすところがあるのである。

紅い木の実が固まつて見えていた。東洋の山水画家が人頭よりも大きい紅い丸を幾つとも木の枝に画いているのにも、自然写生に根ざすところがあつた。或る時は、綿のような雲の上に夕陽を受けた雪山が見えたり、光を受けぬものは鋭く黒く見えたりした。

頂上までには幾つかの停車場があった。頂上に行くまでの山水が既によかった。Rigi
 《リギ》-Staffel, [Rigi《リギ》-Klosterli] シュタッフエル クレストレルリ なる^{ホネル}の峠を通り、Rigi《リギ》
 -Kulmに著いたのは、太陽の傾きかけた頃であった。その旅舎は立派で大きかった。旅
 舎に著いて洋傘のないのに気付き慌^{あわ}てしていると、同車して来た外国の旅人が洋傘を持って
 来てくれた。旅人はやや老いた夫婦でルマニアあたりの者であった。旅舎の部屋は立派な
 のは幾つもあるが、幾つか見て廻^{まわ}って十八フランケンのに極^きめた。当時の相場で邦貨九円
 余に当っていた。

それから旅舎を出て、後ろの方にある丘にのぼって行った。この丘は展望が好く利^きく
 で、アルプス山系のうねりを観ることが出来る。山系のうねりというのも、高く鋭いのに
 は白雪が降り、いまだ雪の降らないのもあり、相交錯したうねりであって、いわば生きて
 いるようなものである。

湖の大小がその間に湛えている。直ぐ目の下にはZuger《ツウゲル》See《ゼエ》が、
 間にやや狭い縊^{くびれ}を持つて北方に見えなくなっている。太陽は傾きかけて、湖水の面は、遙
 か向うは水銀の色に光り、近きあたりは黝^{かみ}ずんだ紺に見えている。北の方に湖の尽きてい
 るその彼方は瑞西の首都 [Zurich] 《チュリヒ》であって、ゆうべまでその旅舎に宿^{とま}

つていたのであった。そのあたりから山脈がやや低くなつて、独逸の国境を越え、遙か彼方に見えなくなつてゐる。ここからやや左手は黒林地方シュワルツワルトである。それから右手に行くとき、Baden 《バアデン》 地方になり、もつと右手はBayern 《バイエルン》 地方になるのであるが、そのBayernの首府の民ミンヘン 頭にあつて僕は丸一年余り勉強をして、つい二ヶ月前までは其処そこにいたことなどを思うと、静かな寂しい気持ちにもなるのである。重りかさな畳まる山嶽と遙か彼方に展開する国土と清く澄んでゐる空気と、そういう空間的關係が如是によぜの感情を起させる、その一種のあやしきこそ東洋山水画の動因ともなつてゐるのであろうか。

僕の今立つてゐるところを旅舎の者どもは「頂上」といつてゐる。そこを少しく降りて左手に来ると直ぐ眼前に高山が重畳して、僕なんかを圧するといふ気持である。その下に [Viewwaldstättler 《ヴイルワルトシュテッテル》 See 《ゼー》] の一部が見える。この湖は此処ここから西南の方に章魚たこの如くにひろがつてゐる大湖で、それに灑そそぐ川などが糸のように細くなつて見えてゐる。嶽たけ 鴉からすのような黒い鳥が一羽湖の方へ飛んで行つた。明朝はこの山上を下りて、それから汽船でこの大湖を渡り Luzern 《ルツェルン》 の方に行くつもりである。

この「頂上」は、風が強く、未だ九月下旬というに僕は冬の外套きを着てゐた。その丘に

三、四人の女が物を売っていた。多くは媪おうなで渋い模様のある布をかぶっている。若い娘が一、二いて紅い豆しぼりのような模様の布をかぶっているが、頬が赤く、この高山の空気に生育した面持であった。これらの女どもは絵葉書だの、木細工の牛だの、笛だの、牛の頸につけている鈴の小さいのだの、駄菓子のようなものだの、そんなものを売っていた。僕はそのそばに行つて、いろいろいじつて見たが、余り元始的で、故郷の土産にするようなものは極めて尠すくなかつた。小さい木製の牛をいじつてみると、耳が突然除とれたりした。これは膠にかわが丈夫でないので除れたのであつたが、僕は知らん振ふりして多くの木製の牛の中にそれを交ぜてしまった。

太陽は黄色になつて山嶽に近づくので、女どもはそろそろ帰り支度にかかつた。女どもは僕らの旅舎ホテルの建つている、Rigi 《リギ》 - Kilm に住んでいゝのではなく、もつと山腹の方に住んでいる。女らの露店には鈴をつけた山羊やぎも時々寄つて来、白い牛、斑まだらうし牛、黒牛なども寄つて来るが、女らはそういう獣にはかまわずに、店を片付けて帰るのであつた。ここの旅舎の者を除いてそういう住民のいるところには小さい加特力カトリックの寺もある。これは或る信心ぶかい二人の女人によつて建てられたのだというものもあつたし、それゆえその近くの巖間いわまから清冽な水の湧出わきるのを「尼の泉」と唱えるなどともいつた。また或処の

小さい寺には、「雪の馬利亞」^{マリヤ}という名なども附いていた。

アルプス山系の一小部分ともいつていい、このRigiも十八世紀の中葉頃から、ぼつりぼつりと登山者の注目を牽^ひき、十九世紀の初葉にはこの頂上まで登つて展望を楽んだ者はよほど増したということである。西暦一八一六年には此処に一つの旅舎^{ホテル}が建てられたのだそうである。しかし何といつてもアルプス山系のうちの一つの山の頂である。ここに登るものも、年経てこの山腹あたりに住んだ者も皆信心ぶかいものであつたに相違ない。僕は暫く下界^{しげ}に住んで来て、さてこの山嶽をば通りしなに既にセガンチニの画境の種々相を感得することが出来た。

セガンチニもいろいろなものを画いた。けれども、その一つの傾向として、「曙」^{あけぼの}（あるいは「黄昏」^{たそがれ}）と題した油絵を取つて来てもいい。この絵を僕は或時は独逸で看^み、また数日前に瑞西で看たのであつた。「Dämmerstunde」^{ダミューンシュテ}となつていた時もあり、「tue:be Stunde」^{ツェーベシュテ}となつていた時もある。日出前の高原を場面として、（あるいは「黄昏」であつて、日没後の余光ともおもう）左手に一人の女が石に腰を掛け、膝の上に両手を組んで眼を瞑^{まなこ}つてゐる。厚ぼたい衣を着て、頭には水色の巾^{きん}をかぶつてゐる。その女の前には鍋に何か煮てあり、それから白い蒸気^{いき}が立ち、鍋の下に赤い火の燃えているところが画

いてある。そのあたり一面は小石原で、石と石との間には草が生えている。セガンチニは、すべてそういうものをば種々の原色の顔料で、一筆一筆に盛りあげている。その丹念に拠よつて、絵に静さと厚みとが出来て来て、甘い感傷性と或る調和を保っていたのであった。女の右手には一匹の大きい斑牛がいて頸に鈴が附いている。あたかもいま吠えているところで、頸を延べ口をあいたままを画いてある。その牛の彼方かなた方向うには柵と牧場とがあつて、一人の男が多くの牛羊を連出すところを段々と遠くに画いてある。その向うには既に峻峰が迫っており、左手には寂しい人家を画いている。女の膝のところには焚火の火明りがうつっているから、暁が未だほの暗いのであるが、太陽が暫くするとこのぼる気配を示して、黄色の光の放射しかけているように画いている。その他の空の部分は黄・赤・紫・青など細かい顔料で埋めてある。

丹念で静かなこの絵は、アルプス高山国の農民を題材として、疲れた旅人の僕の心を慰めてくれたのであつたが、今も僕は Rigi 山上にあつてそれらの絵を思いおこし、その写象は一種の現実性を帯びて僕の眉間にあらわれるのであつた。けれども僕はそういう静かな愛と神秘から、ハウプトマン劇にあるようなもつと熱したのものにも聯想が移つたが、若い僧が山上にのぼって行くと、山羊の牝が寄つて来て、僧の持っている聖典を食べてしま

うあたり、豊かな娘のその紅い脣くちびると心臓の鼓動と、そういうものにも移って行つたが、それは長続せずに消えた。物売の女らの帰りかけたこの丘は、恣ほしいままに寒風が通り、湖水の光もそれを甲よろう山嶽も、その山嶽の上に無限に畳まって見える山嶽の雪も、ついに僕をして大戦後に起つた熱烈難渋な芸術には親したしましめなかつた。

「だいぶ日が短かくなつたようだな。やつぱりあの湖水の方が南らしいね」「そうね。巴バ里リを立つてから、もう幾いくんち日か知ら」「もうそろそろ二月ふたつきだね。海峡でお前反吐へどついでないか。西洋人の尼の奴もお前の側で反吐ついていたたね」「あたし、もうホテルへ帰るわ。此処のところはだいぶ寒い」。

妻と二人は「頂上」の丘を下りて旅舎ホテルに帰つて来た。玄関で絵葉書などを買って、その貼紙を見ると、「御客様方は、日の出三十分前に、アルプス山の角笛を以てお起こし申上げます」
½St. vor Sonnenaufgang werden die Gäste durch Alphornblasen geweckt と書かててあつた。

帰つて来て見ると、部屋は正方形ではなく角のところが少しく欠けている。その部屋に小さい寢床が二つ並んでおり、円い卓が一つと、椅子が三つばかりある。

僕は外套を著、頸に襟巻を巻いて、窓の玻璃はりに顔をおしつけるようにして山を見ていた。山は旅舎ホテルから南方に畳たたなわるもので、近いところから段々奥の方の山になると既に白い雪が降つて水晶の結晶群を見るようである。窓の玻璃が僕のつく息で曇るのを、僕は手の掌ひらで拭いた。

太陽は右手の山の向うに没したらしく、山の色が刻々に變つて行つた。それから下の方にある湖水の一部分が鉛のように見えたり、深い蒼色に見えたりしているうちに、雲が幾通りにも湧いて来て湖の方へ沈んで行つた。暮色のおのずから到つたころ、窓の下を太いズボンきせるを穿いたひとりの若者が煙管をくわえながら通るのが見えた。

そうして僕は沈黙して小一時間も山嶽を見ていただろう。妻は妻で、山嶽などは見なかつた。外套を著たまま妻は両手を円卓に突いて顛顛こめかみのところをおさえているうちに自然と両眼を瞑つただろう。山上のこの部屋の小一時間は、二人に調和があるようでもあり、ないようでもあつた。

そのうちに電気燈がともつた。二人は思出したように相顧みて外套をぬぎ、幾らか儀容

をただして食堂に下りて行つた。食堂は大広間で立派であつた。真夏の頃はこの食堂に客が一杯になるらしいが、きようはせいぜい三組か五組しかいない。僕らは窓際の食卓に就くと、給仕は其処に電気暖炉を持って来てくれたりした。

料理は凝つた旨いものを食べさせた。二人は、白葡萄酒などを飲み、しばらくぶりで静かな夕餐ゆうさんをしたのであつた。それからサロンに行つて新聞などを見、きよう立つてこの山上にのぼつて来た道筋だの、明日立つてこの山をくだる旅程だのを話合つた。それから生れ故郷の誰彼に便りを書こうとしたが、ただ独逸にいる一人の友に絵ハガキ一枚書いたに過ぎなかつた。

差向き僕らは体の疲つかれを休めようと欲してサロンを辞した。そして廊下で一人の女中を通り過がつたが、その女中は僕らに会釈をして通つて行つた。さらに部屋に帰つて見れば、「籠る感じ」である。邪魔するものがない気安さと落付があるに相違ないから、ふたりは突慥つっけんに相争うようなことはなかつた。けれども今此処を領している静寂はついに二人に情感の渦を起させることがない。ふたりは暫らく無言で部屋のなかにいたけれども、僕は今度は服を脱して床のなかにもぐり込んだ。

そうすると床のなかに湯婆ゆたんぼが入れてあつた。「おや湯婆が這入っているぜ。……やつ

ぱり山やま中なかは何か工合のいいところがあるな」そんなことを僕がいつて、足で触つてみると民ミン頭ヘンあたりの湯婆とは感じが違うから、引出すと徳利のような恰好をした湯婆であつた。

「あたしの方にも入れてあるかしら」

「あら、やつぱし入れてあるわ」

「これはまた妙ね。お酒か何かの入れ物いれものじゃないの」

「そうだわ。此処こゝに何か号しるしがあるんじゃないの。これはまた妙ね」

僕の妻はそんなことをいいいい、徳利のような湯婆を元に戻して、それから何かしている様子であつたが、自分の床に這入つて行つた。僕は初めて維也納ウィーンで冬を越したとき、宿の婆さんに頼んでようやく四角なブルキ製の湯婆を見付けてもらったのであつたけれども、それではやはり駄目であつた。そこで僕は欧羅巴ヨーロッパの人々は湯婆を余り用いぬものと観念して、冬の夜を宿に帰つて寝るまでは大部分カフエで過ごすようにしたのであつた。しかるに独逸の民頭ミンヘンに来てみると此処には完全な銅製のものからブルキ製のものまで湯婆が揃つており、また机に向つていて足を暖める電気為掛じかけの装置も出来ていたので、僕は寒さの厳しい民頭ミンヘンの冬を凌ぐことが出来た。

電燈を消してから暫くになるが、妙に僕の目が冴えている。夜は静かで、沁み透るようである。虫の音なんかも聞こえず、雁がんのこえなんかもしない。妻はいつの間にか幽かな息をしながら寝入ったらしい。

湯婆に触つて見ると未だ冷めずにいる。観念のつながりは、所詮しよせん僕の妻は、天竺てんじくのむかし難陀なんだの妻孫陀利すんたりのようには行かぬということに落ちて行つた。しかし大迦葉だいかしよは、清浄な顔をしていた妻の妙賢女みょうけんによと合会ごうえすることなしに十二年を経たとも聞いている。僕の観念のつながりはそういうところにも落ちて行つた。さて僕はやや諸国を遍歴して今アルプス山脈の中にあるのであるが、日本の国土にいるような気もしている。その差別は今の瞬間にはない。

僕は一ねむり二ねむりもしたと思うけれども未だ眠から醒めていない。その時に既に角笛は鳴りはじめていた。はじめのうちは半ば夢のような状態で、間の延びた物ものあわれ哀あな角笛の音律を聞くともなく聞いていたのであつたが、意識がようやくやく醒めて来るに従つて、節まわしが少し巧者過ぎるから喇叭ラッパではないか知らんなども疑つたりした。

けれどもそれは普通の喇叭などでなかつたから、目ざめて見れば二たび僕らをばアルプス山上の気持に引戻すのであつた。程経ほどへて僕らは起きた。それからなるべく寒くないよう

に著込んで階段をのぼって行き、東方にむかう窓のところに佇立して、いまだ黒く明け切らない、山脈の上の空がほんのりと黄色いのを見ていた。

変に凝った雲のかたまりが少しずつ動いているらしく、その上方の鋭い山脈の色合が黒から藍と変つて来ても、西洋人どもは誰ひとり見に来なかつた。そこで僕は部屋に行つて毛布を持つて来、二人はそれで寒さを防ぎながら随分辛抱よく其処に立っていた。

そこで、つまり僕たちふたりは障礙を微塵も受けずにアルプス山上の美しい日の出を見たのであつた。僕は独逸文学のことは好く知らずにしまうが、その中には日出写生のいい文章は幾つかあるであろう。山上の美しい日の出は、いわば劫初の気持であり、開運の徴でもある。それに較べると、現に連れ添うている、我執をもつ僕の妻なんかは、実に奇妙な者のような気がしたのであつた。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆72 夜」作品社

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

1999（平成11）年4月30日第7刷発行

底本の親本：「斎藤茂吉随筆集」岩波書店

1986（昭和61）年10月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※底本では、「」の二点は右下に、「」の二点は左上に、置かれています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2010年5月30日作成

2011年4月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

リギ山上の一夜

斎藤茂吉

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>